

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

* 武蔵野の天文台

もうずいぶん前のことになる。2010年5月末近くだったと思う。三鷹光器会長の中村義一氏が「武蔵野の天文台」と書かれた文章のコピーをお持ちになった。この文章は、国立天文台がある三鷹市大沢の歴史を調べている三鷹市在住の「大沢の歴史の研究者」榛沢茂量氏が、この文章に出てくる「営繕の方」というのは、中村氏の父上ではないかと、コピーを中村氏に送ったものである。中村氏と筆者は昔からのなじみで、筆者が天文台の古い事項を調べていることを知っていて、このコピーを届けて下さった。榛沢氏の手紙によると大正10年の史料と、昭和11年発刊の史料に天文台のことが記されていて、その記事の中に中村氏の関係者が出ているのではということであった。

こういった記事は、現在の国立天文台の者には知りえない貴重な情報が含まれているので、全文を引用させていただく。なお、この文章の著者、史料名などは不明のままである。

以下引用（現代漢字、仮名遣いに直して引用）

武蔵野の天文台

東京近郊では、明治神宮について、また一つの新名所ができた。府下三鷹村大沢の地に新しく竣工した新天文台がそれで、麻布飯倉の天文台も、いよいよ近く同地に移転することになった。

——と、私は大正15年8月の某誌に書いた。

新天文台の敷地約十萬坪、本館建坪五百数十坪、公費七十萬円でその設備東洋一というようなことは、驚くに足りないけれど、しかも、新天文台の位置に至っては、広漠たる武蔵野原の真唯中の丘上に位し、その地形の高燥快活にして、空気清く澄み、殊に日本内地にめづらしいほどの大地平線をもち、遠い樹林と山々の眺望に富む点は、おそらく帝都郊外屈指の景勝の地域と思われる。

新宿を起点とする京王電車を、調布の次の上石原で降りると、新天文台への新道は、停留場前からすぐ起っている。十二町というには近いその新道が、まづ趣がある。両側の麦畑や桑畑がつきると、道は早くも深い雑木林や松林にかかって、そこに秋ならば、桔梗、女郎花のたぐいが、路傍の雑草を美しく彩っている。水車の音が聞こえ、林を越して空車の音が高くひびいて来る。林をぬけると、道は爪先上りの切通しの坂道にかかって、片側の小高い長い丘には、満目の薄が銀絲のごとく日に光り輝いて、ふとその上を見ると、奇怪な銅色の大円塔があらわれている。はるかに無線電信の大鉄塔が望まれる。やがて、大きな本館があらわれ、太陽写真儀とか、子午儀とかの小建物が見えてくる。

昔の騎士の冑を逆まにしたような銅色の高い円塔は、即ち、赤道儀室とよばれるもので、

そこでは主として赤道の観測をするが、また変光星その他の観測にも用いられる。その塔内には昔、大久保利通が海外渡航の折、購入して来たという大望遠鏡が据えられてあって、塔の屋根裏の紐をひくと共に、円形銅色の大屋根は、中央部がぐるりと開けて回転して、そこに天空があらわれる構造になっている。

「この望遠鏡から見た星の光りは実に美しい」案内の若い助手は紐をひきつつ筆者達を顧みて言った。「同じ星の光りといっても、普通肉眼に映るような単純な色じゃありませんからね。紅いのもあれば、青いのもあり、藍もあり、黄色もあり、白もあり、緑もあり、金色もあって、実に千差万別、それが美しく鏡面に映って消えたり流れたりしてゆくところは、なんともいわれない美観です。私たちも最初天文台へ来た当座は、毎晩あの星の色を見るのが楽しみで我を忘れて天体にあこがれたものです。」

「そういえば」と筆者も口をはさんだ「人間の眼が、あの星を見るとき、いわゆる星形に見えるのは、人間の目が、すべて生まれながらに遠視眼たる証拠で、望遠鏡に映る星の本体は、すべて円いというじゃありませんか」

「だが、星形に見えたところが、円く見えたところが要するに同じようなものでしょう。」若い助手はどこか無関心な学者らしい態度で答えた。「要するに吾々が知っているのは、銀河の此方の廿億の星の世界で、それが宇宙で、銀河のむこうというものは無限界なのですからね……ははははは。」

若い助手はこんなことを呟いて、興味なさそうに、再び屋根を閉じて、塔の外へと出た。「けど、そんな学問の話よりは、ここの自然は実にすぐれています。どうです。あの山の姿は！あの富士の肩のところへ、夕日が沈んでゆくところは、武蔵野でなければ見られない大観ですね。」

塔の石段の上から眺めた四方は、それほど遠く打開けて、どこまでも平かなに円い深い地平線をもっていた。その地平線のやや近いところを形づくるものは、多摩彼岸の林丘の、いわゆる多摩の横山で、その下に、水は見えないけれど、あの多摩川の流れを予想させることもその樹の地平線を趣のあるものを感じさせた。

それよりも遠く深く、夕陽に白く煙るような多摩上流の溪谷地、その上を、小さく青く環のように連なり走り波打っている相武甲の遠山、一段高い帝王のような富士の姿、武蔵野特有の赤い大きな夕日は、燃えただれながら、富士の肩の処へ落ち沈んでゆくのであった。

この丘の特色は、実にその稀なる大きな地平線にある。而して、ここが、新天文台の敷地として選ばれた第一の理由も、その地平線あるがためであって、それは、緯度観測所として世界的に有名なかの木村栄博士の観測所が、やはり位置の必要上から陸中水沢の辺陬にあるのと、同一の理由によるのである。

橋本技師（橋本と書かれているが、正しくは橋元なので以下には橋元と記す）は、久しく水沢の観測所にあつて、木村氏と共に緯度観測に従事した人、現在の天文学者中、技術

方面にかけての第一人者である。而して天文台の竣工に先立ち、二三年前から、先発として唯一人ここに入って来て、この新天文台の地球上における緯度観測に従事しているのである。即ち、新天文台の子午儀が、地球上においていかなる位置にあるかを、まづ極めておく必要から、一人ここへ先行しているのである。

その橋元氏は、いかにも天文学者らしい、仙骨をおびた、無頓着な風采の人で、いつも古びた紺の詰襟服に、海水帽の破れたのを戴き、胸には古手拭をぶらさげ、跣足に冷飯草履といういでたちで、広い構内を、自転車を飛ばして、いそがしそうに走り廻っている。やがて夜が来て、それも晴れた夜であれば、技師は夕飯もそこそこに社宅を出て、子午儀室へとやって来る。そして、望遠鏡に対して終夜をあかすこともあれば、一旦社宅に帰って夜明方また出なおして来ることもある。昼は昼で、本館の事務所に向って、作成した暦表を飯倉に届けなければならないという仕事ももっている。

子午儀は屈折子午儀という狭い室で、室前のドアの脇の大きなハンドルを廻すと、屋根は二つに割けて、真上に青空がひらけ、それに望遠鏡の筒が向うようになっている。あたりには、細かい数字のぎっしりつまった大きな暦表や、タイムを受ける受信機や、現時紙や、方眼紙や、それに星表など一面にちらばっていて、隅の棚の上には、燃えさしの蠟燭が立っている。まだ朝なのに夜の時間を示しているような恒星時の時計がある。技師が疲れた体を横たえる藤椅子の前には、望遠鏡の覗く穴がさしだされている。それが、ほとんど針の穴ほどの小さな小さな穿孔である。

「いやもう、忙しくて、忙しくて」と技師は例の仙骨をおびた童顔にひとのよさそうな微笑をうかべながら「見てください、あそこの無線電信の鉄塔の近くに、今、子午環室を作っているのです。あれが出来ると、また何年か、僕はあそこに立籠もることになるのです。」

そう嬉しそうに言って技師が指さす方を見ると、大鉄塔のあちこちでは、人夫たちがまださかんに地を掘り、足場を作って、工事に従っていた。これまでは不完全だった時計室も、こんどは約四十尺の地下に地下室ができ、土中の特別装置が行われそうであるし、新しい子午環が完成すると共に、二十年来その設備がなかったためにむなしく倉庫の塵に埋もれていた、ドイツのゴチエン会社製子午環（フランスのゴーチエ会社製子午環の間違い）も、こんどは引出されて世に出るといふ事であった。

台長として、近くこの地に来る平山信博士は温篤恬淡な、そして忠実な熱心な学問の使徒である。博士は、かねて遊星「東京」の発見者として、世界学界に盛名を馳せているが、道途伝うところでは、博士が「東京」星を発見した夜、フランス天文学会への打電がもう数時間遅れれば、新星発見の功名は危うく他国の学者に奪われたほど、その学者と博士の発見とは、ほとんど同時的だったということである。技師平山清次博士は、その下にあつて、殊に、世界最古の天文学たる支那の星学史に通曉せるその他、新進の技師たちが、やがて近くこの新天文台に集まって観測研究を競う日の盛刊を想像するのは、筆者等の喜

びとするところである。

由来、東京天文台は、緯度経度の観測を以てその名は世界的になっているものである。而して現在そこに集まる学者たちすべて真摯で、殊に、売名宣伝の士を厭い、ブックメーカーを排して、孜々として専心一意、健実なる研究に従事されつつあることは、大いに吾人の意を強うするに足るものがあるのである。

なお、新天文台構内に設けられた 4 箇の大鉄塔は、その高さ二百尺、ループ式鉄塔といわれるもので、そこには、先頃から、文部省測地学委員会の技師が二人出張して、国際報時の無線電信を受信している。即ち朝は五時にフランスのブルドオの時間を受け、夜は九時にハワイからの時間を無線電信で受けて、彼我の時間の打合せをし、世界の時間の統一をはかっているのである。

最初、新天文台がこの地に計画されてから十年になる。その間に敷地の林は拓かれ、雑草は刈られ、狐、兎の野獣は追われて、今はまったく昔の荒蕪の姿を見ることはできなくなった。敷地の一部にあった祠も移され、墓地も取払われて、周囲の地価は俄かに暴騰し、早くも郊外電車が開通するようになった。

今もなお工事を監督している東大営繕課の人は、実に、その当初からここに出張していて十余年の久しい間、この野に埋もれて、ほとんど都会生活との交渉を絶ち、専心、天文台の工事に没頭していたのであった。

「そりや、もう寂しうがしたとも——」

五十年輩の、粗末な詰襟を着たおだやかそうなその営繕課の人は、つい昨年もたづねて行った筆者に、こう語ったのであった。

「それでも、十何年前といえば、私もまだ若うがしたからね、時々は都会の灯が恋しくなって境から汽車に乗って出かけたこともありましたが……だが、それも一年たち二年たつうちには、すっかり無精になってきましたね。最初は東京まで買いに行った日用品も、いつか近所の農家から譲ってもらおうというふうになって、今じゃ、もう東京どころか、調布や府中へでかけるのさえ億劫になってきましたね。その間には子供は生まれる、生れた子供が学校へでるということになると、最初は島流しにでもあわされたような気のしたこの荒涼たる原っ場に、ふしぎな愛着ができてな、今じゃ、もうここを墓場と考えるような気持さえわいてきたのです。土地名物のうどや蕎麦や唐辛などの畑をいじくることも知ってくれば、土着の人ともすっかりなじみになってしまひましてな——そのくせ、周囲の土地がどんなに騰貴しても、それを手に入れようなぞの元気もなければ、野心もない。まあ、私も知らず知らず天文学者にでもなってしまうというわけでしょうね。

そう静かに寂しく笑って、卓の上の設計図をたたみながら、

「ですが、この薄だけは、ほかにはない、郊外第一の名所ですな。見慣れた私なぞの眼にも、秋になると、ああいいと、思わず立ち止って夕日に見惚れていることが、まま

ありますよ。それに月夜の虫の音ときたら！実際、人にきかせずにおくの惜しい……。」

技師の人がそう言って紹介したこの薄を、しかし、筆者は、その数年前、すでに知っていた。それも当時数年にわたって「武蔵野の巡礼」を企てていたような筆者は、今はこの野に絶とうとする薄のなごりをたづねて、およそ三日にわたって、泊りがけで、野のあちこちに薄をたづねて歩いたのであった。そして、小金井方面から、深大寺を経て、この台地へかかった時は、ちょうど晩秋の日没後のことであった。

見ると、はるかな地平線には、まだほの紅い雲の群れが静かに伸びちぢみ漂っていて、広い草原には、もう人夫達の姿一つ見えなかった。ひき入られるような深い大地の沈黙、雨のようなさわやかな虫の音、それにきき惚れながら、筆者は、やがて近い足場にのぼって脚下にひらける満目の尾花に見入ったのであった。眼の前は勿論、後の丘も、沢地も、細流も見えるかぎりはすべて白い尾花の海で、それが、かすかな余照のなかに、明るい鏡のごとく、銀絲のごとく輝やき閃めく壮観には、思わず胸が躍ったのであった。

やがて夕風が出て、青い露のようなものが地上にこめる頃は、むこうの森蔭にまばらな紅い灯が、ぽつちりとさびしくともされた。あとで考えると、その灯が、営繕課の人の家の灯火だったのである。筆者は、じっと、そのさびしい薄と草原の海のなかに漂うような小さな灯に見入っているうちに、ふと、ロシアの大曠野の廣漠寂寥の姿がうかんできた。その荒涼たる大自然の胸を走るシベリア鉄道沿線の駅の人々の、さびしい、なぐさめのない生活のことを思った……。

だが、今では、あの時分の足場に代る、本館の立派な露台があつて、それからは、西武蔵野の大観が、実に一眸に集められるようになっている。

いづれにしても、調布三鷹の新天文台は、学生なぞの好遠足地であるばかりでなく、都人士の必ず一訪せねばならぬ近郊の大きな新名所である。帰途は、北へ二十町で、中央線の境へ出るのもよいが、それよりも深大寺の遊園地へ廻って、京王電車の柴崎停留場あたりへ出るのが最もよい道順である。

引用終わり

この文を読み終えて、何か書くのはもったいないよう気分になる。余韻に浸っているのがよい。

この文章は、天文台の者が書いたものでないことが、客観的な見方になってよいと思われるのだが、現実に見学者を案内する立場になって読んでみると、説明したことが正しく伝わっていないことがある見本のようにも読める処がある。赤道儀について「赤道儀室とよばれるもので、そこでは主として赤道の観測をする」というような表現が出てきたりするのである。

だが、この文章が書かれた時期が、まだゴーチエ子午環室が建設される前、旧本館が出

来る頃のこと、天文学者が書き残していない貴重な資料であることが分かる。筆者はこの文章に出てくる世界の報時信号を受信した4本の60m鉄塔についての記述が非常に興味深かったし、橋元技師の観測の様子が、自分が官舎に住み、観測していた頃の様子とあまりに似ていることに驚いている次第である。写真1は恐らくこの頃の天文台通りの風景であろう、井上四郎の遺品の中の写真である。



写真1 恐らく60m鉄塔から撮った東南方向の天文台通り
このような文献資料がさらに出てくることを願ってやまない。